

# I 赤い花 ガルシ (露)

岩波文庫 神西 清 訳

ピョートル1世の御威光のもと、本日は癲狂院※の査察が行われる日、たまたま一人の患者が、二人の護送人に付き添われてやってきた。

※ 作家ガルシは、ハリコフ精神病院に入っていたことがあり、その体験も重なっている。汽車にまる二日揺られてきたこともあって、護送人はへとへとに疲れていた。患者の方も同様で、ただ彼も気に入らぬことがあると、すぐ暴れるので、狭窄衣を着せられていた。患者は長い廊下にまで来て、あたかもこの経験があるかのような、勝手知ったるという表情でどンドン歩いていった。もちろん本当はわかっていない。石造りの建物の中に入った。ここは個室20室を含んで、定員80名の入居が前提とされているが、実際のところは300人ほどいる。最初の手続きは、湯に入ることだった。すなわち、入浴後は、首筋に発泡膏というものを塗ることになっているからだ。湯番の男は陰気このうえない人物だった。今日の患者もいよいよ湯に入れられたが、彼は少々暴れてしまった。そこで湯番や看視人が彼を取り押さえて、ごわごわのタオルでこすられるのだった。これはされてからわかるが皮膚がむけてしまい、後でひりひりと痛む。ともあれ、彼は今日の痛いプロセスを経て、ようやく体を横にすることができた。

患者は夜中に目が覚めた。というのは隣の部屋のものが大きな寝息をたてていたからだ。鉄格子の隙間からは月光が見える。ここは袋小路になっていて、灌木の叢や紫丁香花(むらさきはしどい)がはびこっている。どの部屋の病人も、疲れ切った青い顔をしていた。彼らは夜のうちは健康な人であるが、朝日がのぼると元の狂人に戻るのだ。

昨日入った患者は、医師の診察をうけていた。彼は医師に、「なぜ僕を見つめるのです？ なぜ監禁するのです？」に「はじまり、「世界は――、小宇宙だ――、アルカリか酸か、世界の平衡は――、さよならドクター――」と言って診察室から出て行った。

彼はそのあと、悠々と歩いた。廊下のはずれまで来て、そこでしばらく佇んでいた。それからガラス戸に自分の顔をくっつけていた。彼はそれから庭の花壇を見た。そこには赤い花があり、彼はそれに見入った。次に体重測定があった。彼はここ3日間大いに食欲があったのに、体重は減っていた。でもどこにいても動き廻っていた。彼は、四肢のずきずきとする痛みや頭のおそろしい重さからぬけたときには、完全に意識を取り戻すことができた。深夜の静寂と薄明りの中で、外界の刺激が少なくなりそれが自分の状態をはっきりと認めさせ、あかたも健全であるかのようになるのだろう。しかし、夜があけると、様々な印象が大波をなして彼を取り囲むのだった。

ここには、あらゆる時代の、あらゆるこの国の人がいる。顕職にあった人やそうでなかった人、不幸のどん底の人、戦争で亡くなった人もここではよみがえってきている。彼らは地上のいっさいの力を集中させたある妖しい魔法の中で自分を見、そして恍惚とした輪の中で自分を中心においている。病院の楡の大樹は、過去の伝説を物語っている。死亡室の建物の中に入ると、古ガラスの乱反射の中に、見覚えのありそうな顔が浮かんでくる。

青天の日のことだった。入院者はこぞって庭に出て思い思いのことができた。道の掃除、砂

まき、花壇の鋤きなおし、キュウリやスイカの世話をするのだった。彼は中央の花壇のところに目をやった。色鮮やかな花が咲き、その真ん中には、ひときわ丈の高い黄ダリヤが誇らしげに植わっている。ウクライナ地方では一般的なバラ、クジャクソウ、ノウゼンカズラらとともに、真紅の罌粟(けし)が燃えるように色鮮やかに咲いている。患者はみな帽子をかぶっているが、それには赤十字の標がついている。彼は二つの赤を見た。あきらかに罌粟の花の赤が勝っていた。かれは罌粟に興味を惹かれ、花壇をまたいで、その罌粟に近づいた。そしてそれをつかもうとしたとき、看視人が彼の腕をつかまえた。

その日はずっと庭をぶらついた。周囲の人と奇妙な会話をした。それで一日がおわり、みなはまたそれぞれの居場所に戻っていった。ただ、彼は看視人の背後に立って、罌粟の花二つを引きちぎり、急いで自分の肌衣の下に隠した。誰も見ていなかった。花は冷え冷えとしていた。彼は急に顔が青ざめて恐怖のあまり目を見開いた。冷汗がでていいる。彼はせかせかと歩き回った。人とすれ違つと、「そばに来ないでくれ」と叫んだ。やがて鋭い怒気を含み、またも歩き回った。彼は、今度はその花をもみしだいてやりたいと思うようになった。食事のときは、木鉢の黍粥が盛られてあり、8人1組になってそれを食べる。少数だが、上等食を食べるものもいるが、それは別室である。彼はさっさと食事とすませ、看視人に「明日はもうお目にかかれまい」と言った。看視人が、なんと陰気なことを、という。看視人は、まあゆっくりとお休みなさいと応えるだけだった。そのことがあって30分もすると、病院はすっかり寝静まった。彼は部屋の隅の寝台の上に着替えもせずに横たわっていた。どうやら熱があるようで、何か意味のわからない強烈な猛毒に犯され締めつけられているように思えた。

彼は一晩中眠らなかつた。彼はあの花を摘み取ったのは、自分にそうする使命があると考えていた。「あの燃えるような赤い花に、世界のありとある悪が集まっていたのだ」 同 p25  
彼はそれから阿片が取れることを知っており、そのことが怪奇な幻想をいっそうに作りだした。「その花は、罪なき人から血や涙を吸ったのだ。だからそれをむしり取って殺しておかねばならないのだ」と確信した。「征服するかされるか、征服された時には自分は名誉ある戦士として死ぬのだ」、「この連中にはそれがわかっていない」彼はそんな幻想に陥ったのち疲れ果てた。だが朝になって再び興奮した。だがその一方で彼の体重はどんどん落ちていった。医師はモルヒネの皮下注射をした。それから三日後、彼は看視人のいるところで赤い花を摘んだ。看視人が駆けよって来て、もめ合い、やがて拘束された。彼は再び自分の部屋で幻想と戦いだした。彼は、その花から悪がのたくり出て、四肢をしぼりあげるように感じた。彼はそれに呪詛の言葉を投げ付けた。夕方、彼は花を炉にくべると、じゅじゅつといって一片の灰になった。明るる日、彼の容態はいっそうに悪化し、青い顔、落ちくぼんだ眼窩は異様だった。彼はまた狭窄衣をられたが、例の使命感から体の力を振り絞り、その拘束から抜け出ようとしたそれに気づいた看視人が3人来て、彼をベッドにしばりつけた。彼は「君たちは自分のしでかしていることが分かっていないのだ。君たち滅亡に瀕しているんだぞ」と叫んでも、うち

一人を残して彼らは引っ込んでいった。一人の老看視人は、この部屋の彼のベッドの下に留まることにした。そしてやがて寝入った。ドアには内側から鍵がかかっている。彼は狭窄衣の袖をベッドの鉄棒にごしごとこすりつけ、時間はかかったが、その紐から逃れることができた。自由の身になった彼は窓から抜けでた。深い闇夜、星座を見分けると、『なんとなく星たちが自分の気持ちを理解し、同感してくれるようなふう』に見えてきた。彼は高い石塀を越え、堅固な鉄棒と尖った先端部をしのいでいった。終夜灯の暗い光の中で、灌木の群れをかき分けて、死亡室の壁に接している石塀を乗り越えていった。「もうすぐおそばへ参ります」と空にむかってささやいた。昇降口のそばを目がけて喜ぶように走っていった。罌粟は花弁を閉じて露をおびた草の上に、姿を浮きださせたい。彼は「最後のやつだ」とささやいて、ふたたび空に向かって「おそばに参ります」彼はそれを根語とそれを抜き取り、ずたずたにもみ潰した。そしてそれを握りしめたまま、自分の部屋に戻っていった。老看視人は寝込んだままだった。翌朝、彼はベッドで死んでいた。その顔は明るかった。昨日までの貧相の上なかつた相貌とは違い、幸福の色をにじませていた。『彼を担架に移したとき、人々は手を開かせて、あかい花を抜きとろうとした。がその手はもう硬直しだして、彼は自分の戦利品を墓へと持ち去ったのである』 同 p31

## II ベアトリックス尼伝説 シャルル・ノディエ (仏)

岩波文庫 ノディエ短篇集から 篠田知和基 訳

ジュラ山地の一番高い嶺の山の麓の村に、サンザシの花の咲くノートルダームと呼ばれる小さな修道院があった。そこに住まいする修道女は質素に敬虔に日々祈りの生活をするのであるが、ある日、この院長が庭の散策をおこなっていて、茂みの中に奇妙なものがあるのに気づいた。それを引き上げてみると、それは生木にちかい粗雑な木にマリア像として彫られたものだった。院長は驚き、それをまさしく天から降ってきた奇跡の聖像と見た。修道女たちも感動をもってそう考えた。それは聖壇に飾られ祈りの対象となった。この奇跡は人に知られ、大勢の人の来訪をもたらすことになった。そうなるこの聖壇の、特にこの粗木のマリア像を世話する係の者が出てくる。この像は聖櫃に入れられ壁龕に安置された。修道女たちはこの聖櫃を前で祈りをささげている間は恍惚となっていた。

ここにベアトリックスという女性がいた。彼女には夫がいたが、十字軍の兵士となったが還って来なかった。そこで彼女はこの修道院に入った。この粗木の聖像を日々世話する係だった。それから2世紀、今もこの修道院では尼僧がこのマリア像を世話している。ある日、この修道院近くに、この地の名望家の騎士が猟にきていたが、刺客に襲われ死にそうになった。花壇の世話をしていたベアトリックスが彼を見つけ、急いで手当を施した。はじめは命の危険があったが回復し、目が開いた。このとき彼は、自分の看護をしてくれるこの女性を見て、「ベアトリックスじゃないか」と声を上げた。二人は許婚者だったのだ。退院にあたり彼レーモンは、彼女に結婚を申し込んだ。彼女は何も答えられなかったが、信仰よりも強く、恥じよりも強く、ああ、彼女が空しく救いを求めたその聖母よりも強い感情』が起こった。彼女は密かに聖壇の内陣に入り、聖櫃を開けた。そしてこ

う告白した、「私は敗れてしまいました。このあやまちの悲しみを隠しにまいます。純潔を失ったこの身を永遠に埋めるために、あなたの身元を去る前に、死をお与え下さい」と。そして像の前にひざまずき、聖像をサンザシの花で飾り、古い方の花を自分のお守りの袋にしまってひしと胸を押さえた。

彼女はここを去ったが、聖母マリアのことは思い続けた。だがある日、彼女はレーモンに愛されていないのを知った。彼女は徳の道から落ち、もはや人の目を気にしなくなった。魂に反発する力もなくなった。それから15年、宝石類はたちまちなくなった。彼女は人から見捨てられ、さげすまれた。世の親たちは彼女を反面教師にした。流浪の彼女の持ち物はあのサンザシの花だけだった。彼女は高い山道も歩いたときには木の根にあたり、足は血まみれになった。夜の帳のなかで長くつらなる光をみたが、その瞬間、闇夜になった。その中で深夜の鐘がなったとき、ある扉にたどり着いた。彼女は「ああ、マリア様」と叫んだ。そして戸口に倒れた。誰かに抱えられた。「ここはどこ？」と口を開いたとき、その人は「ここは花咲くさんざしのノートルダームです」と教えてくれた。彼女は、それじゃここに自分の知っている人は、自分と交替したあの聖櫃係の尼僧だけだと思い、その人のことを語った。するとその人は、「いいえ、ここにはそんな人はいません。私は16年前にここにきました、聖櫃係のベアトリックスさんは替わっていません。今もここにいらっしゃいます」と答えた。彼女ベアトリックスは、聖壇近くに寄り、今まさに聖櫃を世話している人を見た。それは自分だった。するとどこからか声がした。「誰にも気づかれぬように代わりをしてきたのです。自分のかつての部屋にもどきなさい。あなたが悔い改めた恩寵です」と。彼女が部屋にもどると自分の尼僧衣があった。その声は聖母マリアだった。そのマリアは聖壇の階をのぼり、扉を開いて後光に輝きながら聖櫃の中に腰をおろした。同 p225ベアトリックスは衣装を着ると元の尼僧になった。このことは誰も気づかなかった。つまり誰も彼女が15年前からいなかったことに気づいていない。聖母被昇天の祭りの日、サンザシが花をつけ、春の喜びと香気が満ちた。

## III 白夜 (ドストエフスキー 露)

角川文庫 小沼文彦 訳

《第一夜》主人公「私」は、ペテルブルグに住むいわゆるインテリ青年。意思が弱そうで孤独がち、楽しみ事とも無縁だった。でも自分自身の定義は分かっており、人には「夢想家」ということになっている。私は白夜のいま、ふつうの季節なら夕暮れ時のような空の下、ネヴァ河やフォンタンカ運河沿いの海岸通りを散歩していた。十時を過ぎた頃だった、運河の欄干に身をもたせかけて、17、18歳くらいの一人の女性がすすり泣いていた。その後、彼女が酔漢に絡まれたので私は撃退した。《第二夜》今夜は彼女が身の上話をした。自分は盲目の祖母と二人暮らし。以前は家に間借り人がいたが、その人はモスクワに出かけているとのこと。そんな間借り人のことなど、私は斜に構えて聞いていたのだが、ところがその男が実は彼女の婚約者だと分かってきた。彼は夢想家と称して“本日の一報”なんて、安閑と語っていられない気分になった。さらに彼女のいうには、その婚約者がモスクワから帰ってからちょうど1年目となる昨夜のこと、この海岸通りで二人で会う約束になっていたのだが、婚約者は来なかった。今日こそと思って今夜もここへ来たのだが、その気配

はない。彼女は悲しみのどん底、ほとんど絶望状態だった。私は、複雑な心境ながら義侠心を出して、彼女がすでにしたためている手紙を、その婚約者の連絡窓口になっているある伝手のところへ持って行ってあげましょと申し出た。そして今夜はこれで別れた。

《第三夜》いつもの午後十時、二人はこのベンチに来てはいたが婚約者は来なかった。昨日から、私はもう自分こそが彼女の新しい恋人だと“夢想”していた。彼女は、私の恋人願望意思がありありと、言葉や仕草や表情から出ているのに、私に対しては明るく振舞うのだが、それは、私には思わせぶりなしなを作っているとしか思えなかった。私には、もはや彼女はその婚約者のことをあきらめ、気持ちを入れ替えているとしか思えなかった。それでも彼女は無意味に私に「あたしを恋人とは思わないでね」と留保をして、半ば私をからかっていたのだ。時刻は11時になって。「もう来ないよ」、「もう来ないわね」と言い合った二人は抱き合い、それからため息をついてから、それぞれの家に帰ろうとした時だった。突然、ナースチェンカは低い声で「あの人よ」と囁くように言った。私は立っているのがやっとだった。その瞬間、彼女は私の手を振りほどき、素早くその青年のほうに走り寄った。その抱擁に身を任せたとすると、彼女はまた不意に私の方を振り返り、私の方にあつという間に戻ってきた。そして、『両手を私の首に巻きつけ、熱い、息づまるような接吻で私の唇を封じていた。それから、私にひと言もかけずに、ふたたび彼のほうへ身を躍らすと、その両手をつかんで、先に立ってずんずん歩き出した。』 同 p102

《朝》翌朝ナースチェンカからの手紙が届いた。『おお、お赦ください、どうぞあたしをお赦ください。――あなたを裏切るような真似はなにひとつしなかったです。――あたしはあなたを侮辱したのです』私は涙があふれ出た。白夜の時期の太陽の光線が、雨雲の中に隠れてしまい、あらゆるものが色つやを失ってしまった。私は恨んではない。――『君の心の空のいつまでも晴れやかであらんことを、君の美しい微笑のいつまでも明るく、平穩無事であらんことを、そして法悦と幸福の瞬間に君の上に祝福のあらんことを。それは君がもう一人の孤独で、感謝にあふれたハートにあたえる幸福でもあるのだ！』 同 p106,107

## IV 凱旋門 レマルク (独)

河出書房新社 山西英一 訳

元ベルリンの大病院の外科部長ラヴィックは、ユダヤ人を匿ったという理由でゲシュタポに追われ、パリに逃げてきた。今はパリで人目を忍んで“医療活動”をしている。1938年9月のある日、彼は不幸を背負ったような憔悴しきった女とすれ違った。助けの手を差しのべようと彼女を凱旋門近くのあるビストロに入った。カルヴァドス(リンゴの蒸留酒)彼女を落ち着かせさせたが、その惑乱ぶりからは、彼女は2年間暮らした男が亡くなったそうで、気が動転して遺体を未処置のまま部屋を出てきたのだという。彼は早速に行動し、医療上の処置のほか、葬儀屋を手配したり家主のための後片付けをしたりとてきぱきと処理していった。

違法避難民の彼はひっそりした安宿に寝泊まりしている。時々モンマルトルのロシア料理店、兼ナイトクラブ「シェーザード」に行くのだが、ドアマンのポリス・モロゾフと懇意だった。そこでラヴィックはモロゾフに、

彼女を歌手として雇ってくれないかと相談した。というのは、彼女はジョアン・マザーという歌手をしていたこともあったからだ。話はまとまり、彼女はそこで働いた。ただ、彼女自身、苦勞をかさねたこともあって寄る辺なき暮らしに孤独と不安をおぼえているのは確かだった。その後何度かラヴィックは彼女を食事に誘ったことがあったが、あるときレストランの窓越しに、ある男を見、「あの男だ」と直感した。急いで男を追ったが見失ってしまった。レストランに戻り、彼は回想した、――4年前の1934年、夏、ベルリンでのこと、自分と恋人が拷問にあい恋人はその三日後、縊死した。――彼がそのことをモロゾフに話すと、モロゾフも同じような経験をしたとのことだった。さっきの男はそのときの拷問官だったのだ。モロゾフは年齢60をこしもはや積年の恨みを晴らしようがないが、ラヴィックには「君ならできる」と言ってくれた。ラヴィックには、同じく迫害をうけた仲間ケート・ヘグシュトリームという女性がいて、時々パリで連絡を取り合っている。ケートは米国籍をもっていて大使館に保護されている。ラヴィックはジョアンを食事に誘うことがあったが、どこまでもストイックだ。カルヴァドスを飲んでいてもそうだった。彼女とグラスを傾けても、『これで二晩目だね。あぶない晩だ。未知のもつ魅力はなくなったのに、信頼するものの魅力はまだ生まれてこない。ぼくたちは、今夜うまく切り抜かれるんだね』 同 p124上 と酔いきれない。(ジョアン)「あの寒い夜空に、星が裸で光ってるわ。ひとりぼっちでいると、すぐ凍えてしまうの！暑いときだって。ふたりでいたら、凍えっこないわ」に、(ラヴィック)「凍えて死ぬことはあるよ」と、白けた反論をした。

新聞が大事件を報道していた。ミュンヘン協定に基づいてドイツ軍が電撃的にズデーテン地方に入った(1938年10月)。時代を圧するような、兵器工場や強制収容所、インキばかりの正義がのさばっている時代にあつて、モロゾフは、自由なんてあらゆる権力のための壮語だ、賈金だ、精神の賈金だ、宣伝の嘘だ、と怒りをぶつけていた。そのときラヴィックは、カフェの前の人込みを掻き分けて一散に進んでいた。モロゾフは彼のあとを追った。モロゾフがどうしたんだ？と訊くと、ラヴィックは「グレーの外套だ」と言った。だが今回もあの男ハーケを見失った。これで二回目だった。モロゾフは、「そいつを見つけても手を出すな、お前は不法入国者なんだからな、しっかりと居所を確かめるだけにしておけ」と忠告した。

凱旋門の上に銀色の月がかかっていた。彼は思いを重ねるにつれて、いまさらに復習心が高ぶってきた。ジョアンと一緒にいても震えを隠すことができなかったが、青白い顔で虚脱したようなジョアンを抱きしめることで何とかその震えを抑えていた。

ある日、ラヴィックとジョアンは、リヴィエラ海岸のマントーブ湾に行った。その資金は、彼がある手術の請負いで稼いだ2千フランだった。もっとも、同じころケートの方は、金もありフィレンツェ、カンヌ、それからニューヨークへ旅行することになっていた。そこまではいかずとも、彼はジョアンと羽を伸ばした。――ラヴィックは悪い夢をみた。ハーケに追われている夢だ。だが起きると優しいジョアンの笑顔がこちらを見ていた。『光は、海岸の濃藍と空の薄青との間に生まれる白い泡沫のように、水平線のかなたから飛んでくる。』 同 p204上

ラヴィックはモロゾフから借りた車タルボで、ニス、モンテカルロ、ヴァイル・ブランシュヘッドドライブした。憂さを忘れることができた。リヴィエラから帰って1週間たったころ、ラヴィックが町の工事現場の前をとおったときに労働災害が起こった。それを見たラヴィックはけが人に応急処置をしたが、やってきた巡査から身元を訊かれたのがきつかで、不法入国者だとばれてしまった。結果、追放処分となり、こ

んど再入国がばれたときには、半年の留置ということになった。汽車で3時間、スイスとドイツとの国境の町に送られたが、ジエーブも国境管理が厳しく、そこで仕方なくパリに戻った。

ラヴィックは疲れをおぼえた。淫売婦の多くいる居酒屋に入ると、赤い髪の夜会服を着た女が何やら客と揉めていて自分の傷口をじっと見つめていた。その女たちのうちの一人がラヴィックのところまで近づいてきた。優しい笑顔ながら、ただ目だけはじっとすわっていた。ジョアンだった。ジョアンは、「何で手紙をくれなかったの？」と詰問を連発し、挙句「あなたが悪い」と決め付けた。ラヴィックはここを出た。そこで、彼はシェーザード<sup>1</sup>に行くのと丁度モロゾフ<sup>2</sup>がいた。彼は宿に戻りベットに身をすずめた。しばらくすると人影がした。ジョアンだった。「わたしはね、あなたはわたしを捨ててしまいたいのだと思ったのよ、——わたしわかってたのよ」 同 p253下、p254上

その後またジョアンから電話があり、彼はそれにつきあった。彼女は、先日の居酒屋で自分の生業を見られて焦りと呵責を覚えているのに、彼が何の反応も見せないことに不安だったのだ。「わたし、悲しいわ。なぜかわからないけど。一日じゅう悲しかったの。ここにいさせてね」 同 p291下 「あなたはわたしの地平線です。わたしの思いはみんなあなたの内でのことです」と言いはするが、彼は、『粘土と黄金でつくられているんだ。嘘と感動で。欺瞞と厚かましい真実でだ。』 同 p298下 と思うだけだった。

あるレストランでラヴィックの席からハーケが一人で食事をしているのを見た。ラヴィックは急に走り出せるように支払をあらかじめすませた。このときジョアンが現れた。でもいま彼は全神経をハーケに集中していた。するとハーケはラヴィックの額の傷を見て話しかけてきた。拷問による傷だったが、「決闘の傷でして——」と言ってごまかした。それがきっかけで二人はグラスを傾けた。そして世間話をして徐々に馴れ馴れしくなった。今度またシェーザード<sup>1</sup>で会おうと約束し別れた。その約束の日、ラヴィックは計画を実行するつもりだった。車で店の近くまで来たとき、ハーケを見かけ彼を乗せてやった。北停車場を経由して、セーヌにそってブローニュの森に向かった。森の中で車を木にぶつけてしまった。ハーケは気を失った。彼の体を無理に後部トランクに詰め運転した。ラヴィックは運転しながら、ハーケとの仮想問答をしていた——「俺がわかるか?」、「ゲシュタポ<sup>3</sup>の拷問室以来だな」——やがてサン・ジェルマン公園の森に入り、そこに穴を掘ってハーケの死体を埋めた。ラヴィックは亡くなった恋人を思い出した。日々の思い出がよみがえった。遠い、忘れられていた花火が、ふいに地平線のかなたにあらわれるように。

8月(1939年)の午後、街では人の引っ越しがよく見られた。戦争は誰の目にも明らかだった。残るラヴィックは地下室(カトンベ)で沈鬱な空気を吸っていたが、まるで収容所だ。ラヴィックは「なんといつたって、まだマジノ線があるんだ」と思いはしたが、それを当てにするのは悲愴だった。電話がかかってきた。ジョアンだった。「来て、助けて、」だが、彼は断った。またかかってきたが枕で受話器を押さえつけておいた。2時間眠ったあとドアをノックする音が聞こえた。開けると知らない男が、「ジョアン・マザーが怪我をしました」と伝えた。ピストルで撃たれ死にかけているとのこと。その男との短い会話でわかったが、どうやらこの男がピストルを彼女に向けて撃ったようだ。ラヴィックは彼女を病院へ運んだ。病院で弾を無事摘出した。彼女の瞼はあき、脈拍も正常にもどり会話ができるようになった。「わたしはあなたにふさわしいほど——いい女ではなかったわ」 同 p456上 彼女のこどもじみた問い「Mi,ami?」(わたしのこと好き?)に、ラヴィックは「愛という言葉

葉では、いいあらかずことはできないよ。それでは足りないのだ。愛は、ほんの小さな一部分だけだ。川の中の一滴の水、木の中の一枚の葉っぱだ。それは、もっともっと、はるかにおおきいものだよ——」 同 P456下 だがやがて女に痙攣がきた。彼は注射をしたが、彼女は呼吸が弱まっていき、やがて瞼がピクピクとしだし、動かなくなった。ジョアンは共同墓地に埋葬されることになるだろう。ラヴィックが病院を立ち去ろうとしたときに一台の警察のトラックがきた。住民面をした避難民を一斉検束し地下室に集めた。トラックはこんな人々を全部積み込んで運んでいった。乗り合わせた人のうちには馴染みの人もいた。『トラックはワグラム通りを走って、エワールの広場へ抜けた。どこにもあかりはなかった。広場は黒闇々していた。あんまり暗くて、凱旋門さえ見えなかった。』 同 p465上

## V 女の一生 モーハッサン (仏)

岩波文庫 杉捷夫 訳

シモン男爵とアデライド夫人の間にうまれたジャーヌは、ルマンゾールアンで幸せな子ども時代を過ごした。その後5年間は聖心修道院生活を経て魅力的な女性になっていた。フェカンの町へ通じる浜辺の断崖の上にある屋敷には鈴懸や菩提樹が植わり、農園には白楊樹(ポープル)に沿った並木道が連なっていた。村の教会の司祭が近所に住む若いジュリアン・ラマル子爵を紹介してくれてから、両家は仲良くなり、二人はフェカンの海へピクニックに出かけた。ジュリアンはジャーヌによく気をつかい、陽光と小鳥のさえずりの中で、「世界の各地を回りたい」と夢を語りあった。その日以降、ジャーヌの知らないところで、結婚を想定した準備が徐々に進められていた。彼女は訳が分からないうちにピールの教会につれていかれ、いろいろな人から見つめられた。やがて二人は結婚式を挙げた。そしてジャーヌの希望からコルシカ島へ二か月の新婚旅行に出かけた。島はギリシャ文明の名残をとどめ、素朴で自然の情趣がジャーヌにはうれしかった。泊まった民家では歓迎してもらった。二人は、イタリアの有名な都市をめぐるマルセイユに戻ってき、それからレ・ポープルの屋敷に住まいした。

夫ジュリアンは、この屋敷に住むようになってから、この家屋敷、農園、小作人管理から金銭管理などすべての面を自分で取り仕切るようになり、ジャーヌや男爵は少々面食らった。夜の生活では最初に心の波長が合わず別室で寝るようになった。彼女にとって、美男子でやさしかった以前のジュリアンが段々とそうではなくなっていく。そんなことで彼女は、少しずつ性格がとげとげしくなっていく。あるときは身なりの悪い少年をひっぱたいたことがある。近在に住まうブリス・ヴィル子爵夫妻に対し愛想の悪かったこともあった。これにはジュリアンも困り顔だった。一方、ジュリアンも冷たいところがあり、小間使いのロザリに父不詳の赤ん坊がうまれたので、これを近所に里子として出させた。ジャーヌはそれが可哀そうに思ったが、なんとその父親というのが、自分の夫ジュリアンだと分かったときはショックだった。しかしその直後、今度は自分が妊娠しているのを知った。ジャーヌは絶望に落ちた。ロザリは自分から家を出ていった。夫ジュリアンはそれでも吾関せずの態度で、これには彼女の両親も立腹を隠せなかった。彼ら家族は気分を変えるために近在のフルヴィル伯爵夫妻と往き来して会話を楽しんだり、また馬車で遠出したりした。こんな日々の中、ジャーヌは早産した。男児で名はピエール・シモン・

ポルと名付けられた。産後、ジュリアンとジャーヌはフルヴィル伯爵夫妻宅やケートリエ侯爵邸宅を訪ねて楽しく過ごした。ある朝、ジャーヌはジュリアンの姿が見えないのを不思議に思い、馬で駆けてみたところ、海辺で二頭の馬と草の上に二つの鞭そして女用手袋を見つけた。馬はジュリアンとフルヴィル伯爵夫人ジルベルトのものだった。ジャーヌはそれ以上の詮索はせず家にもどったが、遅れてジュリアンが機嫌よく帰ってきた。ジャーヌはポルを抱いているときだけ現実の憂さを忘れることができた。両親がイポールの屋敷を訪ねてきてくれた。が、しばらくたった日、母親は体調を崩し亡くなった。ジャーヌは悲しみのどん底だったが、自分は幸福にならねばと考えた。具体的に頭で考えてみるとそれは結局もう一人こどもが欲しいということになった。彼女とジュリアンの関係では冷え切っていたが、なんとか手管を使って思うとおり妊娠できた。一方それはジュリアンにはとんだ“迷惑事”で、彼は彼で伯爵夫人ジルベルトとの情事に余念がなかった。ところで、この情事は司祭にも知れるところとなっており、司祭はこれをあからさまに非難した。しかし男爵からすれば、司祭のその物言いが強烈すぎ、神に仕える者としての温順な姿勢がなく、すぐ短絡的に行動する性格には馴染みをおぼえられなかった。この司祭があまりに騒ぎ立てるものだから小作人たちも司祭には反感をおぼえ、また妻の情事を暴露されたフルヴィル伯爵としても黙っていられなかった。それでもそんな騒ぎを打ち遣ってジュリアンとジルベルトは密会をしていた。伯爵(夫)は嵐の近づく中、二人を懸命に探した。やがて断崖近くに止まっていた移動小屋に馬二頭がつかがれているのを見て、伯爵は、馬の手綱を切り離しそしてその移動小屋の中を覗いた。そして彼は無言でその移動小屋の梶棒を引き抜き、坂の方へと押し込んで行った。すると移動小屋は動き始め、やがて坂を猛烈な勢いで転げ落ちていった。小屋は大破した。その残骸の中を見ると二人の尋常でない死体があった。伯爵は呆然としていた。そのことを知ったジャーヌはその翌日女兒を出産した。が、死産だった。

ジャーヌにとって今後の生きる希望はポルを育てることだった。偏屈な司祭の教理問答などには関心は起こらず、常識的な宗教感情を自分と父男爵で教えることで十分とした。しかし、ポルが15歳になってから彼の教育をどうするかが問題となった。ポル本人は田舎貴族にだけはなりたくないと考えた。そこで、ポルはル・アールの中学校に入ったが、ジャーヌの過保護ぶりは尋常ではなかった。校長はジャーヌに注意を促した。だがポルの精神的幼さは変わらなかった。彼が二十歳のとき、知らない高利貸しが屋敷にやってきて息子への貸金1,500フランの返済を求めてきた。祖父男爵が孫のために支払った。また学校から彼が長期欠席しているとの連絡があったが、彼はル・アールで女と一緒に生活していたようで行方不明。しばらくしてからロンドンから手紙が来て、5,000フラン送って欲しいとあった。ジャーヌは手紙をくれただけでもうれしく15,000フラン送った。だが何の音沙汰もなかった。久しぶりにポルから来た頼りには、もっともらしい名前の汽船の会社を設立しているとのことで、その後の手紙で85,000フランの送金を頼んできた。しかしその手紙のあと3ヶ月でその会社は倒産した。負債は235,000フランにのぼっていた。

その一方で父男爵が卒中で亡くなった。ジャーヌは二つの大きな悲しみで呆然となり、日常生活も支障をきたすようになった。そんな中である百姓女が家事の手伝いをしてくれ、家の雑事を手助けしてくれた。どこかで見覚えがあったが、大分かかって思いだした。それは24年前に辞めていった

かつての小間使いロザリだった。彼女はジャーヌの窮状を聞きつけて助けにやってきてくれたのだ。そしてジャーヌを励ますとともに、妄想から抜け出てもっと子どもをきちんと管理するように、特に金の無心には毅然とするようにと助言した。ロザリは家計管理の専門家と呼ばれ、生活面できぱきと采配をふるった。残念ながら現実の問題として、この屋敷を売り払い、別の小さな家に移らざるを得なくなった。ジャーヌはそれにしたがって、近くのバットヴィル村の小さな家に移り住むことにした。懐かしい思い出の品はできるだけ運んだが、シモン爺さんや料理女のリュジヴィヌには暇を出さざるを得なかった。ジャーヌとロザリとその息子トニを乗せた馬車は悲しみの中、この屋敷をあとにした。

新しい家に着いて、ロザリはきぱきと調度や内装を整える仕事にかかった。ロザリは納屋の隣の部屋に住むことにした。ちょうどそのとき売り払った家具類の売却代金の入金通知がきた。ジャーヌはこれをポルに送りたいと言ったが、ロザリはそれを止めさせた。ジャーヌはまどろみの中で、母親と一緒に歩いた並木道の情景を思い浮かべ、ポルのことを思い、そして自分の誇りを取り戻そうとした。『純潔であった、身をあやまったことのない、汚点のない女の、昂然たる自負が、心まであさましくしてしまうあの肉欲の汚らわしい実行のために、奴隷のようにとらえられてしまっている男のすべてのあさましさに対し、ますますジャーヌを憤激させるのであった。——ジャーヌには人類がけがらわしいものに思われた。』 同 p308 ジャーヌがポルに「帰ってきておくれ」と手紙を書くと、ポルから返事が来た。「帰りたいが窮迫生活でお金がない、送金してほしい」と。ジャーヌはがっかりした。ロザリの言うように、ポルはすっかり相手の女に取り込まれてしまっているようだ。そしてパリにいる息子のところへ行くことにした。7年ぶりのことになる。ポルはシテ島のソーヴァジュ街に住まいしている。ジャーヌはそこを訪ねたがポルはいなかった。近くの人に尋ねるとポルは近所で借金を作っており、きつと夜逃げをしたのだと教えてくれた。ジャーヌは警察に行って探してくれと頼んだが、逆にホテルに借金取りがたずねてきた。ロザリから手紙が来て、すぐに戻るとあったので、ジャーヌはバットヴィルに帰った。凍えそうなほどに寒い日だった。

ジャーヌの心は病んでいた。小さなことがいつまでも気になる偏執症状になっていた。ジャーヌは過去の妄想にふけるか自分は運が悪いと嘆くかのどちらかだった。余りの偏執ぶりと人生に対する安直な考え方に、ロザリはジャーヌをたしなめた「パンのために働かなくてはならなかったら、なんとおっしゃいますか——」、自分は孤独だと嘆く彼女に、徴兵に取られた子供はどうします。アメリカへ渡ってしまう子供はどうします」しかし、いかにたしなめ励ましてもジャーヌの心の衰えぶりはどうにもならなかった。そこでかつての屋敷を訪ねた。ジャーヌはしばし心が落ち着いた。それから帰宅したら、家にポルからの手紙がきていた。それによると、ポルはいまも窮迫が続いており、加えて妻が三日前に女兒を産んだが妻が死にそうなので子どもを引き取って欲しいというものだった。早速ロザリが引取りにパリへ行った。ロザリからの連絡で三日後に帰ることになった。待ちきれないジャーヌはブーズビル駅まで迎えに行った。ロザリは赤ん坊を抱いて下車してきた。ポルの妻はやはり亡くなり、ポルはその葬儀をすませたのち、明日帰ってくるのだそうだ。ジャーヌはポルの女が亡くなって正直ほっとした。馬車に乗ったジャーヌは、自分の膝に抱いた赤ん坊から命の躍動を感じた。ロザリはジャーヌに言った。「なんのはや、世の中というものは、そんなに人の思うほど善くもなし悪くもなしというものですわい」 同 p338